

韓国・言論学の研究動向：2019 年度

小林 聡明*

はじめに

本稿は、韓国の主要学術誌に掲載された論文の概要を紹介することで、メディア、ジャーナリズム、コミュニケーション領域から構成される韓国・言論学の研究動向について素描するものである。本年度も、言論学としてのメディア、ジャーナリズム、コミュニケーション分野における主要学術誌である『韓国言論学報』（韓国言論学会）、『韓国言論情報学報』（韓国言論情報学会）、『言論と社会』（社団法人 言論と社会）を取り上げ、対象期間は、2019年2月から12月までの刊行分とする。以上をふまえ、本稿では、韓国における2019年度の言論学の研究動向について、次の3点から、その特徴的な姿を浮き彫りにしてみたい。

第一に、前年度に引き続き社会的にタイムリーな問題を課題として設定し、主として計量的な分析を試みていることである。昨年度の研究動向では、タイムリーな問題を扱うことが、たんなる現象の説明に終わりかねない危うさを指摘したが、そうした危険性を回避しつつ、次第に研究の蓄積を増してきている状況にある。

第二に、コミュニケーション技術の発展にともなう、新たなメディアに着目していることである。昨年度は、SNSなどのオンライン・メディアへの関心が見られるようになっていたことを指摘した。さらにゲームをモチーフとした研究が増加しており、こうした点も、韓国の研究動向が有する特徴的な姿の一端を示すものであろう。ただ、ゲームに関する研究には、利用という側面からのアプローチに、やや限定された傾向が見られるため、今後は、さらに多面的なアプローチによる研究の進展が望まれよう。

第三に、ジェンダーの観点からの研究が厚みを持ち始めていることである。それらは、たんにホットなイシューとしてのジェンダー問題というだけでなく、社会に、いかなる問題があり、どのような社会を構築していくことが必要なのかという、強い意志と未来への希望によって支えられた研究である。他の領域と刺激しあい、さらなる発展的成果が期待される。

第四に、日本と同様に、大学改革という大波にさらされている韓国の大学において、言論学研究は、どのような方向に進みゆくべきなのかを検討する研究が、積み重ねられていることである。日本のメディア、ジャーナリズム、コミュニケーション研究が直面する課題とも、韓国の動向は重なり合っており、日本における取り組みにも、きわめて示唆的な研究成果が生み出されている。

第五に、依然として歴史系の論文や、海外の状況を研究課題としている論文が、少ないことである。その理由は、しばしば韓国のアカデミアにおけるポジションと関連していると指摘される。すなわち、歴史や海外の状況をテーマにした研究を行っても、「その先」のポジションに結びつかないというものである。いずれにせよ、韓国における当該分野の研究蓄積の少なさは、日本の研究動向

*こばやし そうめい 日本大学法学部新聞学科 准教授

とのあいだで、比較的顕著にみられる違いとして指摘できよう。

以上、各誌に掲載された論文の概要についてタイトルとともに紹介する。

1. 『韓国言論学報』

(1) 第63巻第1号 2019年2月

①ジャーナリズム、コミュニケーション

「フェイクニュースの露出と伝播に影響を及ぼす要因：性格、ニューメディアリテラシー、そして利用動機」(廉ジョンユン、チョン・セフン)は、フェイクニュースの露出と伝播に影響を及ぼす要因について分析した。「1960年代中後半期朴正熙政府の有線放送一元化事業に対する研究」(尹相吉)は、1965年初等から公報部と内務部が中心に推進してきた「有線放送一元化事業」の背景と内容、経緯を検討することで、権威主義政治体制のもとで、有線放送が公報メディアとして位置づけられる過程について明らかにした。「『市民』としての老人：老年層の制度的、非制度的政治参与動因に対する探索」(閔ヨン)は、自発的な市民参与モデルをもとに何が老年層有権者を制度的、非制度的な参与へと引きつけていくのかについて分析した。

②ニューメディア

「社会問題の解決を論じるオンライン公共圏の構造的条件」(カン・ジュヒョン、イム・ヨンホ)は、オンライン空間で社会的イシューに関する相反する情報に接したオンライン利用者が、どのように討論し、オンライン空間の世論展開が、いかなる様相を見せているのかについて解明するために、テレビ討論視聴者の掲示板内容について分析した。「ゲーム中毒予測のための新たな接近：ゲーム内行動を中心に」(李サンヒョク、金ウンミ)は、ゲーム内の行動が、ゲーム中毒を予測するために、意味ある測定枠組みとなるのかについて検証した。

③放送、コンテンツ、文化

「ドラマ品質 (quality) と解釈の開放性 (openness) が視聴満足度に及ぼす影響：社会的視聴 (social viewing) の調節効果分析」(崔ユンジョン)は、社会的視聴 (テレビ視聴とオンライン対話の結合) 環境において、ドラマの品質と開放性が、視聴満足度に及ぼす影響について分析した。「〈ミスター・サンシャイン〉、歴史の召喚と再現方式」(チュ・チャンユン)は、歴史ドラマ〈ミスター・サンシャイン〉が、どのように歴史的事実から特定の事件を選択し、再配列し、蓋然的で虚構的な事件を作り出すのかについて分析した。「韓国放送政策の価値規範の『過去と未来のあいだ』：価値規範の作動様式に対する試論的な歴史的接近」(尹相吉)は、韓国の放送政策が有する価値規範が、どのように作動してきたのか、その様式について歴史的に分析した。「障がい者関連映像制作者および活動家らの『少数者—になること』に対するメディアバイオグラフィー研究：メディアの障がい者再現と制作活動を中心に」(カン・ジンスク、金ドンミョン)は、障がい者映像制作者のメディア制作活動と生涯転換点分析を通じて、メディアの障害者再現についての問題点の改善法案を導きだし、少数者—になることの実践に内包された含意を導出した。「リアリティ番組の性役割の固定観念演出フレーム分析」(李スンヒ)は、リアリティ番組が、どのように性役割の固定観念を再生産しているのかについて検討した。

(2) 第63巻第2号 2019年4月

①ジャーナリズム、コミュニケーション

「危険認識、恐れ、憤怒が原子力情報探索と処理、共有の意図に及ぼす影響：リスク情報探索処理モデルを中心に」(金ヒョジョン)は、公衆が、どのように危険イシューやリスク情報として認知し、いかなる行動をとるのだろうかについて、説明・予測するために、国内社会的葛藤のイシューである原子力発展分野に着目し、個人が原子力関連情報を探索し、処理する方式に影響を及ぼす認知的、感情的な要因について明らかにした。「韓国の政派言論環境の特殊性は保守と進歩受容者の媒体態度と利用に差別的影響を及ぼすのか：敵対的および友好的媒体に対する政派性の知覚が媒体の信頼と利用に及ぼす影響」(玄キドク、ソ・ミヘ)は、進歩メディアに対する保守メディアの構造的比較優位とメディア批判の公共圏で、保守メディアに集中した批判を考察することで、保守的受容者と進歩的受容者の友好的および敵対的政派メディアの利用様態について解明した。「インターネット対話の市民性活性化効果：言論媒体の利用がインターネットの読み書きに及ぼす影響とインターネットの読み書きが学習と参与に及ぼす影響」(李ジュンウン、李ジョンヒョク、李サンウォン、黄ヒョンジョン)は、言論媒体の利用とインターネット上の市民間の対話が、公的事案に対する学習と政治的参与を助ける点を示した。

②ニューメディア

「モバイルアプリの利用を通じた老人の健康増進：自己効能感と社会的烙印の影響」(安スンテ、李ジュン)は、老人の健康情報モバイルアプリの利用を促進する内的変因と生涯要素としての社会的要因について分析した。

③PR、広告

「企業の危機状況において先制公開戦略が公衆の真正性認識と危機コミュニケーション反応行動に及ぼす影響：安全性基準危機類型、事前評判による差異を中心に」(李ジョンヒョン、金スヨン)は、企業の危機対応戦略、安全性基準の危機類型、事前評判が、公衆の真正性認識および危機コミュニケーション反応行動に及ぼす影響について明らかにした。

④理論、方法

「市場自由主義統治性としての情報統治性：スタートアップ言説の系譜学的分析」(朴テミン)は、フーコーの統治性研究の観点からスタートアップ言説について、市場自由主義の統治性系譜学上にある情報統治性として分析した。

(3) 第63巻第3号 2019年6月

①ジャーナリズム、コミュニケーション

「『経路依存』の罫に閉じ込められた地域言論学：『地方消滅』を煽る三大『構成の誤謬』」(カン・ジュンマン、チョン・サンミン)は、地域言論や地域言論学が経路依存の罫に陥っていることを明らかにし、「地方消滅」をおおっている3大「構成の誤謬」に対する関心を喚起させ、地域言論学が、これに積極的に対応することを提案した。「台風災難報道のフレームと具体的感情の差別

的影響：誘発された悲しみと憤怒の媒介効果中心」(イム・インジェ、羅ウンヨン)は、台風災難報道フレームによって、具体的な否定的感情と危険認識が差別的に現れているのかについて分析した。「新聞が消える理由：ジャーナリズム VS. メディア代替仮説」(朴ヘヨン)は、新聞が危機に陥っている理由として、ニューメディアの代替と補完、新聞の信頼度低下などが、その原因となっていることを実証的に明らかにし、さらに何が影響力を及ぼしているのか、その変化について検討した。

②ニューメディア

「恋人間インスタントメッセージ利用が関係献身に及ぼす影響：社会的実在感と肯定的幻想の効果を中心に」(金チョンヘ、チョ・ジェヒ)は、インスタントメッセージを通じてコミュニケーションを行う現代社会の恋人関係について分析した。

③放送、コンテンツ、文化

「ゲーム化する放送：生産者的テキストからプレイヤー的テキストへ」(カン・シンギユ)は、テレビ放送のゲーム化過程の追跡を行い、放送のなかでゲームが作動するメカニズムについて究明した。「メッセージの種類が自殺予防説得効果に及ぼす影響：社会的影響を中心に」(黄エリ、羅ウンヨン)は、深刻な社会懸案となっている自殺予防に対する実質的な説得戦略について検討した。「文化商品取引に及ぼす国家リスク影響の分析：文明圏と文化的距離の観点の重力モデル適用」(朴ジョンミン、黄ジョヘ、ユ・ジョンソン)は、111カ国の国家をハンチントンの9つの文明圏とホブスタッドの文化的距離に分類したのち、重力モデルを適用し、韓国との交易额と文化商品の輸出交易额に及ぼした国家のリスク影響力について分析した。

④PR、広告

「災難の危険の不確実性と災難類型が公衆の反応に及ぼす影響：被害者非難を中心に」(咸スングヨン)は、最近の韓国社会で発生した大規模災難で被害者非難が発生したことに注目し、災難状況で被害者非難が発生するメカニズムについて、リスクの不確実性メッセージと災難類型の観点から分析し、災難から社会が回復できる方を提示した。

⑤理論、方法

「メディア産業のパブリシティー権導入に関する研究：パブリシティー権判例分析と産業関係者の深層インタビューを中心に」(朴ソンスン)は、パブリシティー権に対する問題についてメディア産業の範疇のなかで分析した。

(4) 第63巻第4号 2019年8月

①企画：言論学60年を振り返り眺める〈韓国言論学報60年研究〉

「メタデータを活用した1960～2018『韓国言論学報』論文分析：ダイナミックトピックモデリング法を中心に」(崔ソンヨン、高ウンジ)は、『韓国言論学報』創刊号から2018年までの全論文のメタデータを活用し、なにごとが高頻度であられるトピックであったのか、どのような方法論や

理論が多く論文で用いられていたのかなどについて明らかにした。

②ジャーナリズム、コミュニケーション

「北朝鮮離脱住民らのメディア利用と社会資本：信頼度、ネットワークそして適応度分析を中心に」(チュ・ジェウォン、金ブヨル、チョン・ジョンウ)は、北朝鮮離脱住民が韓国社会に適応する過程で、メディアを積極的に利用する点に注目し、彼らのメディア受容態度と韓国社会に対する信頼度、人的ネットワーク、適応度間の関係について社会資本の概念を中心に分析した。「言論人の離職意図決定要因の分析：職務満足度と職務疲労度の媒介効果を中心に」(チョ・ジェヒ)は、言論人の離職意図を決定する要因の効果について分析した。

③ニューメディア

「ソーシャルメディアにおける直・間接的脱規範経験が青少年の社会規範認識に及ぼす影響」(チョン・イルグォン)は、中学生を対象としたアンケート調査を分析し、父母世代が脱規範的と規定する行動は、どのようなプロセスを経て、青少年に規範的行動として承認されるようになるかについて明らかにした。

④放送、コンテンツ、文化

「放送の形式的公正性に対する規制方法：フランス放送の政治的多元主義規制を中心に」(ソン・ヨンジュ)は、放送の公正性を審議する方法の正当性と適切性の問題から出発し、フランスの公正性を規制する目的と方法を検討することで、規制努力の本質と社会的意味を提示した。

⑤PR、広告

「帰属複雑性と事後確信バイアスが企業リスクに対する公衆の責任性認識に及ぼす影響」(チャン・ユミ、尹ヨンミン)は、企業リスクの責任性を認識するのに、公衆の個人的帰属特性、特に帰属複雑性と事後確信バイアスが及ぼす影響について検討した。「文化的偏向が気候変化政策の順応と支持に及ぼす影響：危険認識、感情、効能感の媒介効果中心分析」(金スジン、金ヨンウク)は、韓国人の文化的偏向と危険認識の関連性を分析し、気候変動政策の順応と支持に対する影響要因について検討した。

(5) 第63巻第5号 2019年10月

①企画：言論学60年を振り返り眺める〈韓国言論学教育の現況と未来診断〉

「言論学教育60年、どこに行っているのか、どこに行かなければならないのか」(姜明求)は、デジタル・テクノロジーの破壊的広がり直面した言論学が処する危機の内容に注目し、どのように言論学教育を刷新していく枠組みを作り出せるのかについて論じた。「価値、教科目、教授人力の貧困のなかの韓国ジャーナリズム教育の発展方案模索：モデル教育課程の樹立と協業システムの強化を中心に」(崔ジヒャン、チョン・ウンリョン、オ・ヘジョン)は、韓国の大学における学部教育を中心に、どのようにジャーナリズム教育を発展させていくのか、その方案について検討した。「ビッグデータ時代のデータジャーナリズム教育に関する小考：なにを、どうするのか」(尹ホ

ヨン) は、ビッグデータ時代におけるデータジャーナリズム教育の活性化方案について検討した。

②ジャーナリズム、コミュニケーション

「言論受容者の言論人接触経験と言論信頼：言論人接触 - 言論信頼仮説に対する実証テスト」(白ヨンミン、安スチャン、金ウイグン) は、言論の信頼を回復するための現実的、実践的含意を得るために、「言論受容者の言論人接触経験」に注目し、言論不信現象が発生する理由について分析した。「韓国公営放送 TV ニュースの形式的、内容的図式による深層性分析：KBS 〈9時ニュース〉とBBC 〈10時ニュース〉の比較を中心に」(オ・ヘジョン、崔ジヒョン) は、視聴者の減少危機にさらされている地上波放送のニュース影響力現象の原因が、類似した放送ニュースを反復生産するニュース図式にあるととらえ、ニュース図式と深層性の関係について分析した。「多数意見は少数意見をどのように沈黙にいたらせるのか：孤立に対する恐れと論争における成功可能性の媒介効果検証」(チョン・ダウン、チョン・ソンウン) は、沈黙のらせん理論を土台とした研究によって用いられてきた孤立への恐れを測定する方法について検討した。

③ニューメディア

「年齢、所得およびデジタルリテラシーがオンライン個人情報露出および保護行動に及ぼす影響」(崔インホ、チョン・セファン) は、オンライン個人情報の露出および保護行動において、年齢と所得、そしてデジタルリテラシーにかかわるデジタル格差について検討した。

④放送、コンテンツ、文化

「生産と消費のあいだ、遊びと労働のあいだ：〈プロデュース 48〉とファンダムの再構成」(カン・シンギョ、李ジュンヒョン) は、アイドルのファンダムが、遊戯的な側面と労働としての側面も有している点に注目し、新たなファンダムの様相と意味を解明した。

⑤PR、広告

「企業リスク管理コミュニケーションで信頼回復と不信強化の構成次元に関する研究」(金スヨン、朴ヘヨン) は、企業のリスクコミュニケーションについて、公衆の信頼と不信概念を同一線上においた両極端なものではなく、差を浮き彫りにした概念として理解し、リスク管理コミュニケーションにおいて、公衆の信頼を回復させ、不信を強化させる構成次元と、その尺度を開発した。

⑥理論、方法

「認知的・情緒的次元の定向欲求探索：議題設定効果発生原因の概念精巧化」(安ソヒョン、李ゴンホ) は、議題設定効果の原因として知られる定向欲求を概念的に精巧なものとして、再構成した。

(6) 第63巻第6号 2019年12月

①ジャーナリズム、コミュニケーション

「言論報道にあらわれたフェイクニュース言説の属性と社会的実践方向」(カン・ジュヒョン)

は、言論報道にあらわれたフェイクニュースの事例を通じて、韓国社会におけるフェイクニュースの属性を把握し、フェイクニュースに関する言説が、それぞれの行為者によって、どのように形成されるのかについて明らかにした。「科学イシューの政治フレームがメッセージ評価、情緒的態度、政策支持に及ぼす影響：接種と情緒の調節効果を中心に」（金ソヨン、クム・ヒジヨ）は、科学イシューの政治的フレームが、メッセージに対する事実性、信頼度の評価とイシュー関連の個人の情緒的態度、政策的支持に、どのような影響を及ぼしているのかについて分析した。「国内インターネット利用者のPM2.5危険予防行為の意図に関する社会認知接近のRISP、HBM適用モデル：情報露出、主観的規範、否定的感情、危険知覚の役割」（車ユリ、チョ・ジェヒ）は、韓国の一般公衆が、PM2.5の危険を予防する行動プロセスについて明らかにした。

2. 『韓国言論情報学報』

(1) 第93号 2019年2月

「デジタルジャーナリズムの現実に対する韓国の記者らの受容態度：ジャーナリズムの原則と倫理意識の変化を中心に」（李ガンヒョン、南ジュイル）は、韓国言論振興財団が2003年から2017年まで5回にわたって実施した言論人意識調査データを活用し、韓国の記者のジャーナリズム原則とジャーナリズム倫理についての認識変化の推移を分析した。「デジタルメディア環境における『個人』の意味に対する探索的研究」（李ヒウン）は、ソーシャルメディアを指す言葉として用いられる「個人メディア」という用語について検討し、今日のメディア環境において、「個人」という用語が帯びる複合的な意味を明らかにした。

(2) 第94号 2019年4月

「個人化時代の『個人主義』に対する概念的探索」（金スジョン）は、「個人化」という社会構造的変動のなかで、個人主義に対する理解を広げ、現代社会の価値と道徳的原理としての個人主義の可能性について分析した。「セックスの倫理化のためのフェミニズム提案：女性の体とデジタルフェミニズムの連合と連動」（金イエラン）は、ジェンダー平等という虚構的登記表の裏面で、女子愛のセックス領域に対する抑圧と暴力が深化した現実注目し、セックスに対する暴力と支配から、それに抵抗する運動にいたるまで、現代韓国社会で突出している一連の葛藤現象について、セックスの観点から展望した。「ポストヒューマンのジェンダー化と関係論的疎外」（朴ソンヒ）は、ポストヒューマンと身体、フェミニズムの論議を中心に、re-embodimentの観点からポストヒューマンのジェンダー化について批判的に検討した。「四コマ時事漫画の美学的特性研究：金ソファンファン『コバウおじさん』を中心に」（パン・ヒギョン、金アヨン）は、2013年に韓国の漫画で最初に登録文化財として指定された4コマ漫画「コバウおじさん」の形式的、美学的特性について分析した。

(3) 第95号 2019年6月

①企画論文：新自由主義と大学の危機

「国内『デジタル人文学』の定着と屈曲：大学教育とメディアテクノロジーの不安定な接続」（李グァンソク・尹ジャヒョン）は、教育改革という強要された構造調整の延長線上で、テクノロジー

と教育の連携を試みた大学教育政策の流れを検討し、再び新しいテクノロジーと人文学の同居を目指そうとする「デジタル人文学」の誕生を批判的に観察した。「新自由主義統治性と大学教員の主体化」(チュ・ヒョンイル)は、大学教員に課されている新自由主義的統治のメカニズムを明らかにし、大学教員が、新自由主義的統治の装置に対抗し、教育と研究の真正な自立性を獲得できる可能性について論じた。「数値づくり：アカデミックキャピタリズムと学問労働の再構成」(チェ・ソクジン)は、国家、大学、経済間で形成された新たな関係のなかで、学問労働の属性と労働過程、学問労働者の実践が、どのように、ふたたび組み立てられているのかについて分析した。「大学危機に対するメディア文化研究の応答：メディアとしての大学を提案しつつ」(洪ソニル)は、大学と社会を結ぶ知識媒介の危機と規定し、文化研究の奇蹟を通じて、大学の危機を打開できる方法は、どのようなものなのかについて論じた。「芸術大学進学の際級の含意と、この時代の芸術大学教育の方向性：1980～1990年代中産層の芸術専攻経験を中心に」(朴ヘソン)は、韓国社会における芸術教育の性格について、1980年代と1990年代の大学進学と連携した中産層の子女の芸術教育経験にもとづいて分析した。

②一般論文

「地域週刊新聞の地理的市場特性：新聞類型間の比較を中心に」(イム・ヨンホ、崔チャンシク)は、韓国ABCのデータを利用し、地域週刊新聞の主要4紙における地理的な部数分配を分析し、これを通じて、新聞市場の現況と競争の様相を明らかにした。「外国人の旅行リアリティ番組の民族／国家再現：〈ようこそ、韓国ははじめて?〉を中心に」(李ソルヒ、ハン・ヒジョン)は、外国人の国内旅行リアリティ番組が、それぞれの国家・国民を、どのような方式で再現しているのか。その再現が有する含意は、いかなるものなのかについて検討した。「公営放送の制度化過程の再探索：法制化過程を中心に」(許チャンヘン)は、公営放送の支配構造を中心に法制化過程について再検討し、公営放送制度の形成と変化の特徴を明らかにした。

(4) 第96巻 2019年8月

「国内新聞の文在寅政府の所得主導成長に対するニュース報道のフレーム類型分析」(金ウンジョン、ユ・ホンシク、ハン・ギュジュン)は、国内主要日刊紙と経済専門紙が、所得主導成長関連の 이슈を、どのように報道しているのかについて分析した。「気候変化の報道類型が行動意図に影響を及ぼす経路の研究：感情の認知的評価理論中心分析」(イム・インジェ、金ヨンウク)は、気候変動に関する報道類型とフレームによって、認知的評価のレベルと否定的感情が、どのように異なってあらわれるのかについて分析した。「文化研究が追究する『局面分析』の活用と再構成作業の意義」(李ギヒョン、李ジョンミョン)は、スチュアート・ホールらによるPolicing the Crisisの議論を援用しながら、「いま、ここ」への参与志向的な知識の実践と文化政治学の含意と利用可能性について検討した。「ジョイスティックアーケードゲーム文化の生産者」(チョン・ウンギ)は、既存のゲーム研究が注目してこなかったゲームの物質的条件について分析した。「熟議民主主義の韓国的受容：自由主義の急進化と政治参与の拡大」(洪ソング)は、熟議民主主義が、いかなる過程を経て、韓国社会に受け入れられるようになったのかについて明らかにした。

(5) 第 97 卷 2019 年 10 月

「デジタルゲームにおける『プレイ労働』に対する理論的研究：プレイの『機械的隷属』の政治経済学批判」(シン・ヒョンウ)は、デジタルゲームにおける「プレイ労働」に内在する資本主義的な労働の性格を分析し、ゲームプレイが生み出す経済への政治経済学的批判を試みた。「メディア—日常—消費の交差路、TV ホームショッピング：20 代との深層インタビューを中心に」(李ドンフ、金ヘウォン、李ソルヒ)は、日常、メディア、消費の文脈で、20 代への深層インタビューを通じ、彼ら・彼女らの TV ホームショッピング視聴を具体化し、その基調にある文化社会的な意味について検討した。「韓国の新聞のニュース生産文化に対する批判的研究：中央日刊紙の組織文化と記事生産の問題を中心に」(李オヒョン、李ソクホ)は、韓国の新聞におけるニュース生産文化のなかで、新聞社の組織文化に着目し、記事生産への介入方式について、現場という文脈から体系的かつ立体的に分析を試みた。「国内環境コミュニケーション研究の現況と課題」(チェ・ヨンギル)は、韓国国内のメディアコミュニケーション学的环境に対する研究動向と特性について検討し、今後、関連分野の研究が、どのような方向に向かうべきなのかについての議論の手がかりを提供した。

(6) 第 98 卷 2019 年 12 月

「PM2.5 の発生帰属フレームと情報源の信頼度が対応行動の意図に及ぼす影響：感情の媒介効果および文化的世界観と体面の調節効果を中心に」(カン・ユジン、金ヨンウク)は、帰属理論をもとにして、PM2.5 の原因の帰属と情報源の信頼度によって、PM2.5 に対する予防行動の意図と政策参与の意図が、どのように異なっているのかについて明らかにした。「老人のメディア奉仕活動と実践的行為に対する質的研究：『メディア奉仕団 S』の活動を中心に」(金ソンヒ、ムン・ソンファン)は、老人メディア教育の後継活動として結成されたメディア奉仕団の事例研究を通じて、メディア奉仕活動に参加する老人の実践的行為の意味と特徴、メディア奉仕活動と老人らのエンパワメント形成の関係について分析した。「ゲームの利用動機、ゲームの効能感、ゲームの規範性およびゲームの認識がゲーム善用に及ぼす影響に対する研究：多層モデル分析を中心に」(白サンギ)は、ゲーム利用動機、ゲーム効能感、ゲーム規範性およびゲーム認識が従属変数であるゲーム善用に及ぼす影響について分析した。「『情報公開法』上、国家機密を理由に知る権利を制限することの妥当性」(李グンオク)は、施行から 20 年が経過した公共機関の情報公開法に関する法律が、国民の「知る権利」の実現に、どのくらい符合しているのか、「知る権利」は情報公開法上の「国家機密」によって合理的に制限されるのか、その妥当性について分析した。「デジタル文化初期史研究：東アジア地域横断の電子娯楽機・個人用コンピューターの複製を中心に」(チョ・ドンウォン)は、デジタル文化が、どのようにあらわれたのか、国家主導の制度政策史だけでなく、上からのデジタル技術の受容と文化形成の過程に着目し、デジタル文化の初期の歴史について考察した。「個人の悲劇的事件に関する TV ニュース報道の感情的修辞学研究」(崔ジュンシク)は、痛みの概念を通じて、ニュースのテキストのなかに流入した感情について分析した。

3. 『言論と社会』

(1) 第27巻第1号 2019年2月

「1990年代以後の知識生産の脱植民言説に関する批判的分析：知識生産の全地球化を問題化するための一つの省察」(チェ・ウンジュン)は、1990年代以後、知識生産の脱植民言説を分析することで、同時代の韓国の知識生産の状況について、議論をさらに生産的な方向へと導こうとした。「テレビジョンの日常的受容と文化的近代性の経験：1960～70年代を中心に」(李サンギル)は、1960から70年代の近代化の時期に、テレビが、韓国社会に導入された過程について Domestication アプローチの観点から分析し、日常化されたテレビ受容が、文化的近代性の形成で持つようになった含意を受容者の経験のレベルから検討した。「メディアと空間、そして場所の問題：体を中心とした批判的検討」(金サンホ)は、空間と場所概念の哲学的検討を通じて、現代コミュニケーションの現場で受け入れられている空間の概念が、近代哲学と科学的空間概念に基盤を置いていることを明らかにした。

(2) 第27巻第2号 2019年5月

「YouTubeの技術文化的意味に対する探索：『流れ』とアルゴリズム概念の再構成を中心に」(李ヒウン)は、今日のネットワーク社会でもっとも重要な変化のうちの一つである YouTube とインターネットおよびスマートフォンの統合使用の事例に着目し、デジタルメディア環境で YouTube が有する技術文化的な意味について理論的に検討した。「証言とジャーナリズム：〈JTBC ニュースルーム〉の性暴力被害者の生放送インタビュー分析」(崔イスク、金ウンジン)は、2018年上半期の韓国における #MeToo 運動の決定的な触媒となった〈JTBC ニュースルーム〉の性暴力被害者生放送インタビューのなかで、スタジオに直接出演した3件のインタビューを分析することで、被害者の声が、放送という制度と出会うとき、どのような可能性と限界に直面するのかについて検討した。「韓国の災難映画の政治的無意識：2010年代を中心に」(ハン・ソンヒ)は、2010年代の韓国の災難映画の登場および興行を一つの文化現象とみなし、社会との緊密な連関のなかで分析を試みた。

(3) 第27巻第3号 2019年8月

「1950～60年代の世界文学全集生産の文化的近代性：出版の場および翻訳の場の分析を中心に」(チェ・ウンジュン)は、1950年代から60年代における世界文学全集を刊行した出版の場と翻訳の場の形成と変動について分析することで、文化生産物の生産過程に込められた文化的近代性を明らかにした。「二重のコミュニケーション形式としての告白：ミシェル・フーコーの議論を中心に」(李サンギル)は、フーコーの告白を権力-知識の複合体の根本的な要素であり、真実と連携した自己の構成的実践として二重のコミュニケーション形式とみなせることを提示した。

(4) 第27巻第4号 2019年11月

①企画論文

「ポピュリズム、民主主義そしてメディア：自由主義的民主主義との規範的連関を中心に」(ユ・ヨンミン)は、ポピュリズムが新自由主義的民主主義と、その多元主義的条件に及ぼす否定的含意

について、理論的に明らかにした。「『ポスト・トゥルース』時代の真実について：ジャーナリズムと真実の政治に対する小考」（金スミ）は、「ポスト・トゥルース」が、現代社会においてどのような概念としての意味や特性を有しているのか、そして、何が新しいのかについて検討した。「真実、批判そして抵抗：『良心宣言』から『ソーシャルネットワーク真実発言』まで」（金イエラン）は、真実を志向する倫理と政治について、「真実の実践」という概念のもと、批判と抵抗の関係のなかで論じた。

②一般論文

「取材現場を離れた若い新聞記者らの職業的生に対する質的研究：中央日刊紙を中心に」（李ソクホ、李オヒョン）は、韓国の新聞記者の職業的生に焦点をあて、若い記者が、自発的に退社する原因を深層的かつ立体的に明らかにした。

